

令和3年度

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
1	1人1台端末を活用した授業づくりプロジェクト研究	岳野公人	滋賀県総合教育センター 猪田章嗣	研修指導主事 高橋利彰	GIGAスクール構想実現に向けて、1人1台端末を活用した授業づくりについて滋賀県の教員研修を開発する。
2	理科教育に関する研究 1人1台端末環境におけるデジタルコンテンツを活用する小学校理科の授業づくり ー児童が理科の見方・考え方を意識的に働かせて問題解決の活動に取り組むためにー	加納圭	滋賀県総合教育センター 所長 猪田章嗣	研修指導主事 多田尚平	1人1台端末環境における小学校理科の授業づくりにおいて、デジタルコンテンツの効果的な活用方法を探ることで、児童が理科の見方・考え方を意識的に働かせて問題解決の活動に取り組むことを目指す。
3	理科教育に関する研究	藤岡達也	滋賀県総合教育センター 所長 猪田章嗣	三木崇史(係長) 隼瀬憲一郎(研修指導主事) 尾田雄祐(研究員)	思考を整理して再構築する力の育成を目指し、効果的なICTの活用による思考の振り返りを重視した高等学校理科の授業づくりを行う。この取組により、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した高等学校理科の授業改善に寄与することを目的とする。
4	児童生徒が学びを実感することができる授業づくり ー考えを可視化する活動の充実を通してー	長岡由記	甲賀市教育研究所 研究員 山本真由美		児童生徒が授業場面で学びを実感するために、授業改善を進め、考えを可視化する活動を取り入れた授業づくりを行う。
5	授業力向上を支える甲賀流OJTの在り方について	渡邊慶子	甲賀市教育研究所 甲賀市立伴谷東小学校 甲賀市立土山小学校 甲賀市立大原小学校	甲賀市教育研究所 課長補佐 山上紗綾	主体的に学び続ける教職員を育むために、子どもの資質・能力向上につながるOJT(On the Job Training)研修の在り方を、校内研究における実証授業を通し、「甲賀流OJTシート」を用いて検証していく。
6	滋賀県における幼児の運動能力に関する調査 (2021年度)	奥田援史	滋賀県教育委員会 主事 村部謙介		滋賀県における幼児の運動能力の現状を分析すること。
7	幼児の生活習慣に関する調査 草津市立認定こども園を対象として～	奥田援史	草津市こども未来部 副部長 前田典子		新型コロナウイルス感染症流行の影響で、幼児の生活習慣が乱れているのではないかと懸念されている。そこで、本調査では、草津市の認定こども園を対象として、幼児の生活習慣について調査を実施する。そして、全国結果と比較して、草津市における幼児の生活実態を明らかにする。
8	確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成をめざして 「読み解く力」の視点を踏まえた、確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり～(第1候補)～	大橋宏星	東近江市立能登川北小学校 北村定治	教諭(研究主任) 榎並洋貴	「問題場面を的確に把握する(情報を整理すること)」「解答に向かう道筋を自分の言葉で説明すること」にこだわって授業を展開することで、「題意や相手の考えを的確に読み解くことができる子ども」「自分の考えを根拠とともに明確に説明しようとする子ども」の育成をめざす。
9	児童生徒の学びの「質」を高める指導の工夫 ～授業における「教師のコーディネート力」の向上と改善を通して(第2候補)	大橋宏星	東近江市教育研究所 所長 宮居伝	指導主事 斎藤陽	小中学校算数科・数学科において、教師の発問をはじめとする指導や支援の工夫、手立てなどを通して、児童生徒の学びの「質」を高め、「わかった!」「できた!」「がんばった!」を実感できる授業をめざし、東近江市の授業改善推進に資する研究とする。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
10	算数・数学教育実践研究セミナー (第3候補)	大橋宏星	豊郷町立豊郷小学校 中野泰弘	教諭 松尾甚吾 (教職大学院院生M2)	県内の算数・数学の授業改善に熱心に取り組む教職員が集まり、算数・数学の授業実践の交流や最新の教育界の話題について語り合うことで、算数・数学の授業力向上をめざす。
11	自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 ～図画工作科の鑑賞(朝鑑賞)の活動を通して～	青木善治	彦根市立平田小学校 校長 加藤洋一	教頭 中尾一美	朝学習時における朝鑑賞(対話型鑑賞)の効果を検証する。
12	教師の変容と省察を促す研修会の試み ～校内授業研究研修会を通して～	青木善治	栗東市立葉山小学校 校長 小林久祥		教師の変容と省察並びに同僚性を促す研修会の在り方について追究する。
13	教師力向上を目指したOJT研修 ー 同僚性を生かした授業改善を手掛かりにして ー	今井弘樹	天津市立瀬田中学校 校長 奥村公英	教頭 福田寛 教諭 荒川拓也	本校では20～30代の教員が半数以上を占めるようになり、教師力の向上が喫緊の課題となっている。そこで、今年度、学校全体で授業力の向上を図るべく積極的な研修を行い、同僚性を生かし、新指導要領に合わせた授業改善をすすめ、学校全体で教師力を高めていく。
14	石山っ子わくわく親子で畑体験隊	○森太郎 與倉弘子 久保加織 石川俊之	天津市石山公民館 館長 目片泰博	石山公民館生涯学習専門員 清水琴野	農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし、学校現場において、そのニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携(公民館、ボランティアスタッフ)して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生が主体的にプログラムを計画・実施する場面を設け、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。
15	地域の在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラム開発	森太郎	甲賀市立甲南第二小学校 校長 池田修一	教諭 第三学年担任 松尾幸澄、 教務主任 菰田智恵	子供の「生きる力」の育成のための体験活動の充実、伝統と文化の尊重の観点から、在来野菜を教材とした栽培学習の充実が求められている。このような学習は、小学校の総合的な学習の時間で行われることが多い。しかし、子供たちが在来野菜を栽培するという活動だけに終わっていることが多く、体験活動を様々な学びに繋げる授業づくりが必要だと考える。そこで、本研究では、在来野菜の栽培を通した総合的な学習の時間のプログラムを開発する。
16	通級指導教室担当者の発達障害児への指導力向上をめざしたインシデントプロセス法を活用した事例検討型研修の開発	山川直孝	米原市立米原小学校 校長 有川博延	教諭 北村和美 (通級指導教室担当)	・通級指導教室において、ADHD、LD、高機能自閉症等、発達障害の児童生徒に対して個に応じた指導が充実するよう、インシデントプロセス法を活用した事例検討型研修を開発する。 ・米原市に設置されているすべての小学校中学校の通級指導教室担当者5名(米原小、坂田小、大原小、柏原小、大東中)を対象に実証研究を行う。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
17	特別支援学校(知的障害・肢体不自由)のカリキュラムマネジメントに関わるアクティブ・ラーニングを取り入れた研修プログラムの開発	山川直孝	滋賀県立甲良養護学校 校長 福井亜由美	教諭 田中芽	特別支援学校(知的障害・肢体不自由)の教員を対象に、新学習指導要領をふまえた教育課程の充実や授業改善と関わって、グループワークによるアクティブ・ラーニングを取り入れた研修会を行い、教員の主体的な学びを促す研修プログラムを開発する。
18	中学校美術科のインターネットを活用したチームによる授業改善研究	新関伸也	滋賀県中学校 美術教育連盟委員長 梶岡創 (大津市立打出中学校教諭)	高島市立安曇川中学校教諭 堤祥晃(副委員長) 大津市立仰木中学校教諭 北崎丈士(研究部長)	令和6年度全国造形教育連盟全国大会滋賀大会及び毎年の県大会発表会に向けて、中学校美術科教員の授業力向上・改善のため、コロナ禍の中でインターネットを活用したチーム別研究会を行う。 ・公開授業者だけでなく、多くの美術教員に学びが共有できるシステムをつくる。 ・学校を超えた県内の複数教員で題材開発を中心にして授業改善を蓄積することで、多角的、客観的な美術科の教材研究につなげる。 ・実践研究した成果を本学部学生と共有し、将来の美術科教員として必要な資質能力を培う。
19	美術科におけるICT機器活用の可能性と課題	新関伸也	高島市立安曇川中学校 校長 藤原浩之	教諭 堤祥晃	中学校美術科のICT機器を効果的に活用した先進的な授業実践を実施・検証し、その成果や課題を学生と共有し、教員として必要な資質能力を育成する。
20	特別支援学校における音楽づくり実践プロジェクト	林 睦	北村昭夫 (滋賀県立野洲養護学校) 左谷光夫 (滋賀県立盲学校)	岡ひろみ (滋賀県立野洲養護学校高等部教諭) 向知尋 (滋賀県立盲学校高等部常勤講師)	特別支援学校における音楽づくりの実践のモデルケースを他の学校に実践的に広めることを目的とする。
21	3歳児の遊びを豊かにし、育ちを支える環境づくり	塩見弘子	草津市立老上こども園 園長 中島昭子	副園長 宗次奈巳	草津市立老上こども園は、昨年度より幼稚園型認定こども園に移行し、3歳児の保育を開始した。2年保育を行ってきた幼稚園の環境を、3年保育、特に3歳児にふさわしい環境を作っていくためには、どのような工夫が必要か。当園の環境を見直す中で、3歳児の発達特性を考え、育ちを支える環境を構築していきたい。
22	一人ひとりのよさや可能性を見取る特別活動の観点別評価と個人内評価 —学習評価としてのカリキュラム・マネジメントを視点として—	○岸本実 白石牧恵 岸田蘭子	栗東市立栗東中学校 安土憲彦 校長	教諭 小谷麻史子 (校内研究主任)	中学校では、今年度より新しい学習指導要領および指導要録に基づく学習評価が実施されている。特に、特別活動においては、特別活動の特質と学校の創意工夫を生かすため、「各学校が評価の観点を定め」た上で、新しい学習評価を行っている。「将来の生き方を拓く特別活動の在り方」を主題とした校内研究とも連携して、一人ひとりのよさや可能性を見取る特別活動の観点別評価と個人内評価の在り方を考察することが、本研究の目的である。

No.	プロジェクト名	本学担当者	共同研究機関・担当者		研究内容(連携事業内容)
23	義務教育現場を対象とした【声を鍛えるルーティントレーニング】の作成・実施	渡邊 史	滋賀大学教育学部 附属小学校 田中宏子 先生	矢吹雄介 先生 (5年生担任・合唱部指導者)	● 発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築、汎用の動機づけを行う。 ● 児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙、すなわち「客観的視点」を獲得していくためのきっかけとなることを期待し、トレーニングを実施する。 ● 「声表現」の具体的スキル構築に取り組むことで、「声」を構築するために必要な身体各部の働きを意識させることで心身の健やかさを保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけを提供する。